

「英語授業力」強化 マニュアル

岡秀夫・赤池秀代・酒井志延 著

萩野俊哉

(新潟県立新潟南高等学校教諭)



本書は、英語教員の「授業力」を伸ばす研修プログラムにおいて、テキストとして使うか、あるいは、参考書として読むことを念頭に置いて編まれた本です。文法、発音、語彙といった言語要素の指導や、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能別指導、そして、それらを統合した「総合英語」としての指導や発展的指導あるいは評価といった項目を盛り込み、包括的な内容を目指しています。また、随所に、例えば「あなたの生徒の『英語を話す力』という統合能力をどのように測定したら良いのか考え、意見を交換してみましょう」といった「課題(Topics for Discussion)」も設けてあり、グループ協議などで利用できるような工夫も施されています。

本書の大きな特長のひとつは、その実用性です。例えば、単語帳を使って生徒の語彙力を伸ばす指導、音読の意義と指導法、英作文の評価方法、予習プリントの有効的な活用方法、ペアワークを用いたコミュニケーション能力の評価など、「なるほど」と思い、「これならできる」「やってみよう」とつながる具体的で示唆に富む内容が満載されています。それもそのはず。この本の著者の方たちは、中学校や高等学校の現場の第一線で現在活躍中であり、ご自身が実際に教壇に立たれて実践されてきた、いわばその「結晶」を集めたものだからです。さらに、この本が強い説得力をもって私たち読者に迫ってくるのは、それらの実践を裏付ける理論が見えるからです。理論と実践とは相反するものではなく、相互に補完しあうべきものであるという本書の姿勢が垣間見られるところです。

思えば便利な世の中になったものです。私もそうであるように、一人前の英語教師になろうと思ったら、

同僚や先輩の教師から教えを乞うのは言うに及ばず、広く校外や全県、全国のさまざまな研究会に参加し、そこでの発表や協議、あるいは、参加者との雑談を通して多くのことを貪欲に学び取ろうとするものです。本書が世に出たことにより、それらの必要性がなくなったとまでは言うつもりはありません。しかし、本書を読み、活用し、なおかつ種々の研究会や研修プログラムに参加することのできる今の、特に若い英語教員をつくづくうらやましく思うのです。

最後にひとつ。「英語授業力」を強化するのは誠に結構。しかし、その結果生徒が実際にどのように変容したのか。その追跡とその後の指導や改善もまた大切であることを忘れてはならないと思います。

英語教師のための 教育データ分析入門

三浦省吾 監修

前田啓朗・山森光陽 編著
磯田貴道・廣森友人 著

田中武夫

(山梨大学助教授)



最近の専門雑誌の論文を読もうとすると、統計処理の壁に必ずぶち当たる。データ分析の部分を除いて論文の大筋は掴めたとしても、統計処理が理解できなければ深いレベルで論文を読みこなすことは容易ではない。自分がデータを用いて調査したり実験したりする場合は言うまでもない。統計処理の手法や用語をひと通り学び、データ分析および統計処理の理解を深めたい者にとって、本書はお薦めである。本書の大きな特長は、英語教育に携わる者に統計処理の手法をわかりやすく解説するため、英語教員に身近なテストングに関する具体的な事例をうまく活用した点である。

類書にはない本書の優れた点を3つ指摘したい。第1に、数式をほとんど使わずに統計処理の手法をわかりやすく解説しており、解説文そのものもとても読みやすい。この種の本は、一般に複雑な数式や専門用語にあふれ、必ずしも読者にとって親切ではないことが多い。それを本書は、噛み砕いた表現で丁寧に解説す

ることで、うまく解決している。第2に、統計処理を行う研究者が陥りやすい箇所に触れ対応策まで提示している。分析結果の書き方の例を示す細かい配慮もなされ、今後の英語教育研究の質的向上に貢献するであろう。第3に、英語教育研究に必要なと思われる統計処理の手法が網羅され解説されている。妥当性、信頼性、標準偏差、t検定、分散分析、ノンパラメトリック検定、相関分析、回帰分析、一般化可能性理論、因子分析、カイ二乗検定、クラスター分析、2元配置分散分析、構成方程式モデリング、など多岐に渡り、統計処理を概観したい者にとってありがたい。

これまでデータ分析および統計処理において、例えば次のような経験や疑問を持ったことのある場合、本書は大変役立つであろう。A校は英語の平均点が65.2点でB校は66.3点だったから、A校の方が英語の成績がよくないという安易な解釈をしたり、5%水準でt検定を行った結果、有意差があり2群の差は大きいと言えると言断したり、また、因子分析や重回帰分析、クラスター分析などの用語は聞いたことはあるが、何のために用いられるのか詳しく知りたいと思ったりした場合、本書は良いガイド役になる。

ExcelやSPSSなどの統計ソフトが身近にあり、具体的な調査や実験を一度でも行った経験があれば、よりいっそう本書が読みやすいかもしれない。統計処理を用いた調査および実験を計画している、すべての研究者、および、これから研究者を目指す者にとって、本書は必読書の一冊である。

とに文学作品が減ってきているように思える。たとえば、サロイヤンの『人間喜劇』、ソローの『ウォールデン、森の生活』などは教室で扱ったものだった。

本誌の特集「英語教育に文学を！」は、そんな中、「まさにその通り！」と言いたくなる特集である。なぜ教科書から文学が消えたのか、本誌にその理由が出てくる。コミュニケーション活動が中心の現在の英語教育にあって、文学はしだいに削られていったというのである。また、共通一次試験（センター試験）が文学離れを決定的にしたともある。出題されないからだ。

文学作品を通して、説明文では味わえない一つ一つの文のすばらしさを感じてほしいと思う。オーセンティックな文学作品で、人間の生き方や文章の美しさを読みとってほしいと思う。だから「心のノート」を配るより名作のある教科書を、という意見には「賛成」と言いたくなってしまふ。

本誌には文学を教材にした授業の実践例（中、高、大）があり参考になる。使える題材についても紹介がされているので、「文学作品を使って授業をしてみよう」という意欲をかき立たせてくれる。明日からの授業づくりに至れり尽くせりの特集である。

今回は例年の特集II「英語教育の総括と展望」の他に「アンケートから読む日本の英語教育」と題する特別記事があり、生徒の英語の授業へのアンケート結果が出ている。昨今、生徒による授業評価が学校現場にもおろされ、各学校はその対応に迫られているが、興味深い結果が載っている。

予想通り、文法や訳読だけの授業は評価がよくないが、難しそうな構文をていねいに説明したり、語源を教えたりと少し工夫すると好印象の授業になる、という結果は興味深い。また、授業の中身だけでなく一人一人の生徒に対する配慮や、授業がスムーズに行えるクラス・マネジメントの資質が印象深い先生になるという結果も出ている。

教師として英語力を磨くという研修もさることながら、授業を行う上での構想や運営に関しても大切な要素であり、しっかりやらなくてはと思わせられる。

文学の特集、そしてこのアンケートの結果と、日頃の授業を振り返り、これからの授業に活力を与えてくれる特集記事であった。ぜひ、ご一読を。

英語教育 10月増刊号

〈特集I〉英語教育に文学を！

〈特集II〉2004年度の英語教育
総括と展望

仲条重幸

(東京都立調布北高等学校教諭)



最近、教科書に文学作品が少なくなっている。環境問題や遺伝子関連のもの、比較文化論等、取り上げられる題材は多彩であるが、教科書が改訂されるこ